

学びの場としてのインフォーマルセクター：
ガーナ国クマシにおける自動車修理徒弟のライフコース

山田肖子(名古屋大学)

私は、教育学者の立場で、アフリカで、学校教育に関する政策や学校現場、学校と社会の関係について調査を行ってきた。しかし、この 20 年ほどの間に爆発的に学校が増えたとはいえ、学校における教育は、アフリカ社会では異質な外来のものであるという感覚はぬぐえない。「学校＝教育」ではないし、アフリカ社会には、伝統的に固有の教育方法や教育観がある。そこで、「教育」を学校の中の問題としてとらえるのではなく、社会の側から学校や教育の意味を再検討したいと考えている。

今回の発表では、ガーナ国のクマシという町にある古い産業集積地において、徒弟を行っている若者とのインタビュー調査を基に、徒弟という伝統的かつインフォーマルな教育の場が、どのような経緯と背景を持った若者によって選択され、また、そこではどのように技能が学ばれているかについて述べた。

顧客のニーズに臨機応変に対応しつつサービスを提供する技術労働者の技能形成は、学校の技術職業科などで教えられるモジュール化した知識を越えた部分が少なくない。学校教育が普及し、中学程度まで修了する者は増えたが、いまだに中卒後の大部分の若者は徒弟などのインフォーマルな場で学びを継続していると考えられている。この調査を行っているクマシ県は、歴史的な産業集積地があるという背景もあってか、技術訓練の質が高いというイメージが広く定着しており、その名声に惹かれ、徒弟も、ブルキナファソやナイジェリアといった近隣国から来ている者もいる。また、周辺の技術高等専門学校、ポリテクニク、大学なども機械、電機等のコースが充実している。学校教育とインフォーマルな場でのまなびは相互排他的なもののように考えられることが多いが、本調査からは、学習者が、自らの人生設計や社会経済的状况に応じて、教育提供側の意図とは関わりなく、様々な学びの機会を選びとり、再構成していることが見て取れる。すなわち、専門家が開発したカリキュラムを教える学校教育を受動的に受けるのではなく、学習者自身が、自らの将来設計や置かれた状況に応じて学ぶ場や内容を選んでいるという、教育に関する意思決定主体の明確な違いを示している。

こうしたアフリカ社会での調査は、単にアフリカの状況を理解することにとどまらず、日本にいと当然のものとして見過ごしてしまいがちな教育学や学校教育の枠組みを問い直す機会を提供する可能性がある。今後、学習者の動機や技能形成の方法、社会における知識の意味などを、より深く研究していきたいと考えている。